

【ポスター発表】

## 外国につながる家庭と子どもの育ちを支援する意義と課題

## —外国人家庭への子育て支援に関する文献の研究—

○ 川崎医療福祉大学 小川 知晶 (8357)

小田桐 早苗 (川崎医療福祉大学・8491)

キーワード3つ: 外国籍家庭・子育て支援・コミュニティネットワーク

## 1. 研究目的

近年、少子高齢化による人材不足やグローバル化を背景に、日本で働く外国人が増加している。そういった中、外国人労働者に帯同する家族の増加に伴い子どもの数の増え、慣れない環境で子育てをする外国籍住民が増加している。日本語が十分に理解できない環境下での子育ては、周囲とのコミュニケーションが取れないばかりか、子育てに関する情報や必要とされる支援にアクセスすることや不安や悩みを伝えることが難しいという問題が挙げられ、社会から孤立してしまう危険性がある。また、外国につながる子どもたちは、言語・文化・教育へのアクセスなど、数多くのハードルを越えていかなければならない。そういった環境に置かれている子どもの最善の利益を、どのように尊重していくのか、社会の課題として問われている。そこで本研究は、先行研究から外国人支援の実態や子育て支援の意義と課題を文献から整理し、今後増加する外国につながる家庭と子どもへの支援と、コミュニティの支援体制の構築について示唆を得ることを目的とした。

## 2. 研究の視点および方法

本研究は、子育てをしている外国籍家庭が、孤立することなく社会とつながるための支援や取り組みに関する文献検討を通して、①言語・文化の違い、②支援へのアクセス、③地域・他機関のネットワーク、④家族支援ができる専門性の人材の4つの視点から整理した。

## 3. 倫理的配慮

本報告における引用・参考文献については、著作権保護に基づき、研究目的以外に使用しないことを誓約する。併せて、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守し、先行研究を引用した場合には、その存在を明示する。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。また、本報告にあたっては「研究発表の要旨集掲載原稿」への投稿内容について、共同研究者の承諾を得ている。

## 4. 研究結果

## ① 言語・文化の違い

近年の研究では、子どもの年齢相応の思考力・判断力をつけるには日本語習得よりも母親が話す言語(母語)での語りかけが重要といわれている。しかし、周囲から日本語での子育てを期待され、母語での子育てが難しい環境にあることや、母語で子育てするサポートや仲間を得ることが困難であることがわかった。また、子どもの年齢によって子育て相談の内容・相談頻度が異なりことが示唆された。

## ② 支援へのアクセス

子育てにおけるサポート源は、「同国出身者」「家族」「日本人の知人」「職場」「学校・保育所」「外国人支援サービス、支援団体」「宗教関係者」などである。さらに、学校に派遣されている通訳が、言語のサポートだけでなく、学校生活全般にわたってサポートを提供しているケースも存在する。子育てに必要なサ

ービスや支援について多言語のパンフレットやHPなど充実しつつあるものの、通訳の配置に関しては足りていない状況が見られる。また、居住地域によってはサポートを受けられない地域差の問題があることが指摘されている。

### ③ 地域・他機関のネットワーク

情報交換や地域の行事への参加を促すなど、こちらから働きかけを行うばかりでなく、地域に存在する外国籍コミュニティと連携することも、地域の支援体制づくりにつながる。安全な場で自分を表現して人の話を聞くことで、参加者自身がアイデンティティへの誇りを感じ、自分と将来に希望を持つ体験となるなど、地域のネットワークが情報交換や居場所づくりにとどまらず、精神的なサポートの場になることが主張された。

### ④ 家族支援ができる専門性の人材

子育て中の外国籍家庭は、複数の生活課題を抱える状況が先行研究によって浮き彫りになっている。子育てをしている生活実態がある中で子育て支援のみにとどまらず、情報提供はもちろん、日本語・母国語学習、雇用の相談、子育て相談、自助グループの組織化、日本人と多様な形でかかわる場の提供など、家族への包括的な支援が求められる。子育てに焦点を当てた支援でなく「家族支援」としての位置付け、子育てに関わること以外の親へのアプローチを含め、多様な機能を果たすワンストップ・サービスの提供機関となる必要がある。国籍が理由で特別な支援ではなく、対象家族のニーズに合わせた支援の提供であり、そのためには、言語・文化以外の外国籍家庭の細かなニーズ調査が必要などの課題があることがわかる。

## 5. 考察

外国籍家庭の子育ては「言葉や文化の違いによる困惑」「子育て支援が得られない」「情報アクセスが困難」「言語コミュニケーションの問題」などにより、子育てをしていく上で不安を抱えていることが判明した。外国籍家庭の育児の悩みなどに関するニーズが表面化されにくいいため、どこで(場所)どうやって(方法)ニーズを拾い上げるのかを考える必要がある。また近年、未就園の子どもと保護者を対象とした取り組みが展開される中、外国籍の子どもと保護者の参加は少ない。そこで、外国籍の子どもと保護者の参加を待つのではなく、支援者側からアプローチしていくことが大切ではないかと考える。そしてそこには、子育て支援を切り口とした家族支援、外国人の子育て家庭が必要としている支援へつなげる重要な役割があると考える。

\*本研究は、科研費基盤研究(C)23K01867の研究助成を受けている。

### 【参考文献】

中島有季子：外国籍の母親の子育てに関する調査研究—支援のあり方に向けて—,高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要 健康福祉研究 13(1),13-24,2016./南野奈津子：在日外国人の子どもの支援—福祉、教育をめぐる現状と課題—,保健の科学 60(9),593-597,2018./五十嵐ゆかり：在住外国人の母子保健—妊娠・出産・育児支援の在り方—,公衆衛生 83(2),120-126,2019./外国人住民の妊娠から子育てを地域で支える—かながわ国際交流財団(KIF)の取り組み—,保健師ジャーナル 75(1),35-40,2019./武田江里子・木村幸恵・田坂満恵：在日外国人である母親の望む子育て支援と影響要因—国籍・気質・「愛着バランス」尺度との関連—,母性衛生 59(4),770-776./福田久美子：外国人住民のための子育て支援,小児科 62(3),245-252,2021./千葉千恵美：国際結婚児と外国籍子育て支援—国内調査から得られた現状と課題について—,高崎健康福祉大学紀要(15),87-93,2016./椎葉奈子・杉本敬子：英国のコミュニティにおけるボランティア団体による子育て支援の実際—ホームスタートUKの視察から—,日本国際看護学会誌 4(2),58-68,2021.